

正定滅度

ノート

2020.03.

本願寺名古屋別院

おとめ

仏告阿難。其有衆生。生彼国者。皆悉住於。正定之聚。
所以者何。彼仏国中。無諸邪聚。及不定聚。

十方恒沙。諸仏如来。皆共讚嘆。無量寿仏。威神功德。
不可思議。

諸有衆生。聞其名号。信心歡喜。乃至一念。至心廻向。
願生彼国。即得往生。住不退転。唯除五逆。誹謗正法。

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

世尊我一心

帰命尽十方

無碍光如来

願生安樂国

2022（令和4）年度 提要

【題意】

浄土真宗の法義は、現生の此土において正定聚の利益をえて、当来の彼土において滅度の利益をうる。この二つの利益は明確に区別されなくてはならず、現生の此土において、一分でも滅度の利益をうるものではないことを明らかにする。

【出拠】

第十一願文「設我得仏、国中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覚」

【釈名】

「正定」「滅度」

【義相】

- 一、第十一願文の意
 - ①願文当面の意
 - ②正定聚の意義
- 二、現生正定聚の義
 - ①現生正定聚の文証と理証
 - ②信益同時と現生十種の益
- 三、滅度密益と一益法門の否定
 - ①「即得往生」と正定聚の関係
 - ②「不断煩惱得涅槃」の解釈
- 四、広門示現相
 - ①難思議往生
 - ②浄土の正定聚

『安心論題綱要』勸学寮 昭和60年

〔題意〕

真宗は現生正定聚・彼土滅度の二益であって、此土において滅度の果を一分たりとも証得するのではない旨を明らかにする。

〔出拠〕

『御文章』一帖目第四通（真聖全三・四〇七・原典版一一一三）に、
問ていはく、正定と滅度とは一益とところろべきか、また二益とところろべきや。答ていはく、一念発起のかたは正定聚なり。これは機土の益なり。つぎに滅度は浄土にてうべき益にてあるなりとところろべきなり。されば二益なりとおもふべきものなり。
とある。その他、存覚師の『六要鈔』（真聖全二・三二二）にも、

問、定聚・滅度は二益欺、又一益欺。答、是二益也。等と釈されている。

〔釈名〕

「正定」とは正定聚の略であって、正定聚とは邪定聚・不定聚に対し、滅度に至ることに正しく定まった聚類の義である。「滅度」とは大涅槃であって、生死の迷いの因果を滅した仏果をいう。

〔義相〕

願文当面

第十一願には正定聚と滅度が誓われてあり、その成就文には正定聚が説かれているが、第十一願の当面では正定聚も滅度も、共に彼土の益として示されている。

宗祖の釈

然るに宗祖は、第十一願の滅度は第十八願の因によって彼土において得る究竟仏果とし、その正定聚は第十八願の機の現生における得利益とせられる。なぜ現生正定・彼土滅度とせられるかというと、名号は悲智万行を円具せる法であるから、これを領受したとき、その機の上に仏因が円満して、彼土に往生すると同時に滅度の大果を得る。したがって、滅度に至るまでの因の位、すなわち正定聚は現生で語られるわけである。

二益

ところで、名号を領受することは、仏果を開くべき因徳が衆生に具したことであつて、現生にあつて滅度の果を一分たりとも証得することではない。ゆえに滅度密得・一益法門（一益達解）の義は宗祖の意に反する。また、経釈の上に彼土における正定聚を示されているのは、滅度の果を得た後の広門示現の相とするのである。

〔結び〕

真宗は、現生正定聚・彼土滅度の二益を説くのであつて、此土において滅度の果を証得するとは解しない。なお、正定聚は彼土にもいわれるが、それは果後の広門示現の相であるとする。

平成13年本山「正定滅度」判決

【題意】

浄土真宗は現生正定聚・彼土滅度の二益を語るものであるが、現生(此土)においては、滅度の果を一分たりとも証得するものでないことを明らかにする。

【出拠】

『教行信証』「証卷」には「然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の羣萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚之教に入るなり。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。」「真聖全二、一〇三」とあり、『六要鈔』には「問ふ。定聚・滅度は是れ二益欺、又一益欺。答ふ。是れ二益也。定聚といふ者、是れ不退に当たる、滅度と言ふ者は是れ涅槃を指す。」「(同前三二一)」とあり、また『御文章』には「問ていはく、正定と滅度とは一益と二益とあるべきか、また二益とあるべきや。答ていはく、一念発起のかたは正定聚なり。これは穢土の益なり。つぎに滅度は浄土にて得べき益にてあるなりとこころうべきなり。されば二益なりとおもふべきものなり。」「(真聖全三、四〇七)」とある。

【釈名】

「正定」とは正定聚の略であって、正定聚とは邪定聚・不定聚に対し、滅度に至ることに正しく定まった聚類の義である。

「滅度」とは大涅槃であって、生死の迷いの因果を滅した仏果をいう。

【義相】

① 正定聚を現益とし、滅度を当益とする理由。

第十一願に正定聚と滅度が誓われてあり、その成就文には正定聚が説かれているが、第十一願の当面では正定聚も滅度も共に彼土の益として示されている。

然るに宗祖は、『如来会』の第十一願成就文によって正定聚を現生の得益とする。

何故そうなるかといえば、名号は悲智万行を円具する法であるから、これを領受した時、その機上に仏因が円満して、彼土に往生すると同時に滅度の大果を得る。したがって、滅度に至るまでの因の決定、すなわち正定聚は現生でいわれ、果の顕現が滅度である。

② 正定聚の現当両義

経釈の上に彼土における正定聚が示されてあるのは、滅度の果を得た後の広門示現の相とする。

③ 滅度密益、一益法門を否定する理由

名号を領受することは、仏果を開くべき因徳が衆生に具すことであって、現生にあつて滅度の果を一分たりとも証得することはできない。穢土であり、煩惱具足の凡夫であるかぎり、証果は彼土である。それ故「信巻」の便同弥勒釈には「臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。」（真聖全二、七九）とある。

④ 現生正定聚の具体相

現生十種の益の中に、現実に具体的に生きる意味が与えられている。
以上

会読案

【題意】【出拠】提要に順う

【釈名】

「正定」

正 まさしく 当 まさに
定 決定 必定
聚 聚類 なかま
「正定聚」 まさしく滅度にいたることが定まった聚類

上座部の三聚

『長阿含経』(T.1.50b)

是論。復有三法。謂三聚。正定聚邪定聚不定聚。

世親『阿毘達磨俱舍論』卷十 (T.29.56c)

世尊於此有情世間生住沒中建立三聚。何謂三聚。頌曰

正邪不定聚 聖造無間餘

論曰。一正性定聚。二邪性定聚。三不定性聚。

何名正性。謂契經言。貪無餘斷。瞋無餘斷。癡無餘斷。一切煩惱皆無餘斷。

是名正性。

定者謂聖。聖謂已有無漏道生遠諸惡法故名爲聖。獲得畢竟離繫得故。定盡煩

惱故名正定。諸已獲得順解脫分者。亦定得涅槃。

何非正定。彼後或墮邪定聚故。

又得涅槃時未定故。非如預流者極七返有等。

又彼未能捨邪性故。不名正定。

何名邪性。謂諸地獄傍生餓鬼。是名邪性。定謂無間。造無間者必墮地獄故名

邪定。

正邪定餘名不定性。彼待二緣可成二故

* 説一切有部俱舍論* 卷第十

正定聚 正性 (涅槃) に定まる聚類

四果の聖者

預流果の聖者は正性 (涅槃) をさとることが定まっている

【四向四果】仏教用語。四向四得、四双八輩ともいう。部派仏教において、修行していく段階を意味する「向」と、それによって到達した境地を意味する「果」ことを総称したもの。預流向 (よるこう) ・預流果、一來向・一來果、不還向 (ふげんこう) ・不還果、阿羅漢向・阿羅漢果をさす。

(一) 預流向とは四諦 (したい) を觀察する段階である見道で、欲界、色界、無色界の三界の煩惱を

断じつつある間をいい、預流果とは見道のそれらの煩惱を断じ終つてもはや地獄、餓鬼、畜生の三悪道には墮することがなくなる状態をいう。

(C) 一來向とは四諦を観察することを繰返していく修道の段階で、欲界の修道の煩惱を6種に分類したうちの9種の煩惱を断じつつある間をいい、一來果とはその9種の煩惱を断じ終つた位をいう。

(D) 不還向とは一來果で断じきれなかった残りの3種の煩惱を断じつつある間をいい、不還果とはその3種の煩惱を断じ終つた位をいう。

(E) 阿羅漢向とは不還果を得た聖者がすべての煩惱を断じつつある間をいい、阿羅漢果とはすべての煩惱を断じ終つて涅槃(ねはん)に入り、もはや再び生死を繰返すことがなくなった位をいう。

出典 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典

邪定聚 無間業をつくり、邪性(地獄傍生餓鬼)に墮することが定まっている聚類

不定聚 正とも邪とも定まらない聚類

善縁にあえば正定聚

悪縁にあえば邪定聚

大乘の三定聚

龍樹『釈摩訶衍論』(L32:596)

然三聚門有其三種。云何爲三。

一者十信前名爲邪定聚。不能信業果報等故。三賢及十聖名爲正定聚。決定安立不退位故。十種信心名爲不定聚或進。或退未決定故。

二者十信前并十信心名爲邪定聚皆無善根故。無上大覺果名爲正定聚已滿足故。

三賢及十聖名爲不定聚。皆未究竟故。三者十信前名爲邪定聚。無樂求心故。

十聖名爲正定聚。已得眞證故。十信三賢名爲不定聚未得正證故。是名爲三。

	正		等覺
正	不	正	十地
不		不	三賢
	邪		十信
邪		邪	十信前

宗祖の三定聚

邪定聚

邪雜の行に心が定まっている聚

『一念多念文意』(『聖典全書』二卷699頁)、『註釈版』(89頁)

「邪聚」といふは、雜行雜修萬善諸行のひとつ、報土にはなければなりといふなり。

雜行 往生に対してよこしまな行

雜修 さまざまな行をまじえて修し純一でないこと。專修に対する語。

① 雜行を修すること

② 五正行の中の正定業(称名)と助業(読誦・觀察・礼拝・讚嘆供養)を同格にみなして修すること。

不定聚

所属不定・転入不定の聚

『一念多念文意』（『聖典全書』二卷669頁）

「不定聚」は、自力の念佛、疑惑の念佛の人は、報土になしといふなり。

法は他力

本願の名号を行っている

機は自力

名号の功德性にのみ目をつけ、称名の功德を積み上げて

回向して救われようと計らっている

要門と弘願の中間にあって、進めば弘願、退けば要門に墮する

正定聚

正定業たる名号を領受した信心の聚

「正定の聚」左訓 「必ず仏になるべき身」

『一念多念文意』（『聖典全書』二卷664頁）（『註釈版』680頁）

一般に菩薩の修道の地位を示す三定聚を
第十一願成就文の心によって真假分判の名目として転用している。

「滅度」

梵語 *nirvāṇa* ニルバーナ。音写泥洹^{ないおん}。摩訶般涅槃那。の訳語。仏果涅槃。

滅 煩惱を滅した境地

度 生死の苦海を渡ること

【義相】

一、第十一願文の意

①願文当面の意

願文

(11) たとひわれ仏を得たらんに、國中の人・天、定聚に住し、かならず滅度に
至らずは、正覚を取らじ。

成就文

それ衆生ありてかの国に生るるものは、みなことごとく正定の聚に住す。ゆゑはい
かん。かの仏国のなかにはもろもろの邪聚および不定聚なければなり。

Q どういう意味か。

A 浄土に住生した者は正定聚。浄土には邪定聚・不定聚がないから。

②正定聚の意義

Q 彼土の正定聚はどういう者か。

A 不退にして必至滅度。回伏の難なし。輪廻の迷いに後戻りしない。

『往生論註』上(『聖典全書』一巻449頁)

「易行道」とは、いはく、ただ信仏の因縁をもつて浄土に生ぜんと願すれば、仏願力
に乗じて、すなはちかの清浄の土に住生を得、仏力住持して、すなはち大乘正定の聚
に入る。正定はすなはちこれ阿毘跋致なり。

『同』下 三願的証(『聖典全書』一巻528頁)

仏願力によるがゆゑに正定聚に住す。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至り
て、もろもろの回伏の難なし。ゆゑに速やかなることを得る二の証なり。

二、現生正定聚の義

①現生正定聚之文証と理証

Q 宗祖の現生正定聚の文を挙げよ。

A 「証文類」真実証釈 証果徳相

「証文類」(『聖典全書』二巻133頁)

(『註釈版』307頁)

然煩惱成就凡夫、生死罪濁群萌、獲往相回
向心行、即時入大乘正定聚之數。住正定聚
故必至滅度。

(現代語版『教行信証』)

さて、煩惱にまみれ、迷いの罪に汚れた衆生が、
仏より回向された備前備後(五念門行の徳を収めた
一心)を得ると、たちどころに大乘の正定聚の位
に入るのである。正定聚の位にあるから、浄土に
生れて必ずさとりに至る。

Q 宗祖の第十一願文を読み

A

「証文類」(『聖典全書』二巻133頁)

(『註釈版』308頁)

【2】 必至滅度の願文、『大経』

「たとひわれ仏を得たらんに、国のうちの

『一念多念文意』(『聖典全書』二巻663頁)

(『註釈版』679頁)

たとひわれ佛をえたらむに、くにのうちの人天、

人・天、定聚に住し、かならず滅度に至らずは、正覚を取らじ」

【3】 『無量寿如来会』(上)

「もしわれ成仏せんに、国のうちの有情、もし決定して等正覚を成り、大涅槃を証せずは、菩提を取らじ」と。

【4】 願成就の文、『経』(大経・下)

「それ衆生ありて、かの国に生るれば、みなことごとく正定の聚に住す。ゆゑんはいかん。かの仏国のうちにはもろもろの邪聚および不定聚なければなり」と。

Q 『一念多念文意』の成就文の文意は如何。

A 彼の国(真実報土)に生まれむとする者は正定聚に住している。なぜなら邪定聚不定聚は真実報土に往けないから。

Q どうして「生彼国者」を現生と読めるのか。

A 『如来会』願成就文による。

【6】 またのたまはく(如来会・下)、「彼

の国の衆生、若し当に生れん者、皆悉く無上菩提を究竟し、涅槃の処に到らしめん。なにをもつてのゆゑに。もし邪定聚および不定聚は、かの因を建立せることを了知することあたはざるがゆゑなり」と。〔以上抄要〕

(現代語版)

「浄土に往生する人々は、みなすべて正定聚のものであり、必ずこの上ないさとりをきわめ、涅槃に至るであろう。なぜなら、邪定聚や不定聚のものは、仏が浄土に往生する因を設けられたことを知らないので、往生することができないからである」

Q 文意如何。

A 彼土の衆生としてこれから生まれようとする者は滅度に到る。邪定聚および不定聚は往生できない。

Q 邪定聚不定聚が真実報土に往生できない理由は？

A 彼の 因を 建立せることを 了知することあたはざるがゆゑなり。

Q 弥陀が 衆生の往因を 成就せることを 了知していないから

Q 正定聚はどうして真実報土に往生できるのか。

A 彼の 因を 建立せることを 了知。

Q 弥陀が 衆生の往因を 成就せることを 了知していたから

Q 彼の 因を 建立せることを 了知するのは彼土か此土か。

A 此土。往生する前の現生。

Q 宗祖の現生正定聚の理由如何。

A 撰取不捨の故に

『末灯鈔』第1通(『聖典全書』二卷777頁)(『註釈版』735頁)

眞実信心の行人は撰取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す

「行文類」行信利益（『聖典全書』二卷48頁）（『註釈版』187頁）

何に況んや十方群生海、

斯の行信に帰命すれば、

摂取して捨てたまはず。

故に阿弥陀仏と名づると。

是を他力と曰ふ。

是を以て龍樹大士は

「即時入必定」と曰へり。

曇鸞大師は

「入正定聚之数」と云へり。

行信（南無阿弥陀仏）に帰命すれば
名義の通り現生に摂取不捨の利益に預かる

彼土正定聚を現生に転釈している

Q 摂取不捨とはどういう状況か。

A 現生護念の利益を得ている状況をいう。

『愚禿鈔』下 二河譬の「我能護汝」の「護」を釈して（『聖典全書』二卷306頁）（『註
釈版』539頁）

「護」の言は、阿弥陀仏果成の正意を顕すなり、また摂取不捨を形すの貌なり、すな
はちこれ現生護念なり。

阿弥陀仏の本願に信順する人は、仏の正意にかなったものとして光明の中に摂め取られ決して
見捨てられることなく、臨終の一念まで護り続けられる。

Q 何が護られるのか。

A 往生成仏の因。すなわち信心が護られる。

『現世利益和讃』（浄土和讃109）（『聖典全書』二卷393頁）

無碍光仏のひかりには 無数の阿弥陀ましまして

化仏のおのことごとく 眞実信心をまもるなり

往生成仏の因としての信心が退転しない

必ず往生し、成仏すべき身に定められている

ゆえに正定聚である

Q 『易行品』はどのような書か。

A 難行道に堪えられない凡夫を救って不退転地に至らせる「信方便易行」を明かす。

Q 「即時入必定」の文意如何。

A 現生で不退転地にいることが説かれている。

『易行品』弥陀章 本願趣意の文（『聖典全書』一卷415頁）（『註釈版』153頁）

三心 十念

若人念我称名自帰 此土

即入必定 此土

得阿耨多羅三藐三菩提 彼土

『易行品』弥陀章偈 本願成就趣意の文（『聖典全書』一卷415頁）（『註釈版』153頁）

聞信一念

即得往生住不退転

人能念是仏 無量力威〔功〕徳 即時入必定

引文 「行文類」(『聖典全書』二卷24頁)(『註釈版』153頁)、『尊号真像銘文』(『聖典全書』二卷615a頁)(『註釈版』650頁)、「即時入必定」のみ引文 「行文類」49、『一念多念文意』664

Q 『論註』はどのような書か。

A 五濁の世、無仏の時代を生きる凡夫が、阿弥陀仏の本願の救いを信ずる因縁によって、仏願力に乗じて浄土に往生し、仏力の住持を得て大乘正定聚に入らしめられる。

Q 『論註』の「入正定聚之数」はどのような位か。

A 五功德門 近・大
菩薩の行位 初地

不退転地 初めて無漏智を起こして真如を悟り、愛憎の煩惱を断ち切り、輪廻転生しない。
歓喜地 心身共に喜びに包まれる

正定聚 必ず大涅槃を悟り、仏果を完成することが決定している

【参考】『浄土論』の不退転は彼土見仏のとき

(『聖典全書』一巻435頁 442頁)

観彼安楽世界

見阿弥陀仏

此土で五念四心

彼土で授記

礼拝	近	得生安楽国
讚嘆	大会衆	入大会衆数
作願	宅	入蓮華藏世界
觀察	屋	受用種々法味樂
回向	園林遊戯地	廻入生死園 至教化地

Q 彼土に往生してから正定聚になるとしたのはなぜか。

A ①『大経』第十一願文・成就文、『浄土論』が彼土正定聚だから。

②正定聚は無漏智を起こし三界を超越した聖者であり、濁世の願生者は死ぬまで凡夫だから。

Q 宗祖が現生正定聚の証文として挙げたのはどう理解すべきか。

A 煩惱具足の身のまま、撰取されていることは、穢土にありながら尽十方無碍光如来の秩序の中に収められていることをあらわす。

他力回向の信心はその体仏智、仏心であり、無漏智である。だからよく成仏の因となる。彼土の聖者と同じく、穢土にありながらも大会衆の数に入る。

歸入功德大寶海 必獲入大會衆數
得至蓮華藏世界 卽證眞如法性身
遊煩惱林現神通 入生死園示應化

②信益同時と現生十種の益

Q 正定聚に住するのはいつか。

A 信樂開發時剋之極促

(「信文類」信一念釈『聖典全書』二卷93頁)

夫按眞實信樂、信樂有一念。一念者斯顯信樂開發時剋之極促、彰廣大難思慶心也。是以『大經』(卷下)言、「諸有衆生、聞其名號信心歡喜、乃至一念。至心廻向。願生彼國、即得往生、住不退轉。」

Q 文証如何

A 先の信一念時剋釋と信相釈をうけて

「信文類」信一念釈(『聖典全書』二卷94頁)

獲得金剛眞心者、

横超五趣八難道、

五趣 地獄餓鬼畜生人間天上

八難 地獄・畜生・餓鬼・長寿天・

辺地・聾盲瘖啞・世智弁聰・仏前仏後

必獲現生十種益。

何者爲十。

一者冥衆護持益、二者至德具足益、三者轉惡成善益、

四者諸佛護念益、五者諸佛稱讚益、六者心光常護益、

七者心多歡喜益、八者知恩報德益、九者常行大悲益、

十者入正定聚益也。

当来往生が定まっているからこそ

現生に正定聚

三、滅度密益と一益法門の否定

①「即得往生」と正定聚の關係

『御文章』一帖目第四通（『聖典全書』五卷74頁）
問ていわく、正定と滅度とは一益とこころうべきか、また二益とこころうべきや。答へていわく、一念発起のかたは正定聚なり。これは穢土の益なり。つぎに滅度は浄土にてうべき益にてあるなりとこころうべきなり。されば二益なりとおもうべきものなり。
存覚師『六要鈔』証文類釈（『聖典全書』四卷1166頁）
問。定聚・滅度は是二益か、また一益か。答。是二益也。定聚と言ふは是不退に当たる。滅度と言ふは是涅槃を指す。

②「不断煩惱得涅槃」の解釈

「証文類」引文『論註』（『聖典全書』二卷135頁）（『註釈版』310頁）

「真仏土文類」引文『論註』（『聖典全書』二卷170頁）（『註釈版』357頁）

（現代語版『教行信証』本願寺出版）

『註論』（論註*巻下）曰、

【二三】 『往生論註』にいわれている。

「莊嚴清淨功德成就者、
偈言觀彼世界相勝過三界
道故。此云何不思議。有
凡夫人煩惱成就、亦得生
彼淨土、三界繫業畢竟不
牽。則是不斷煩惱得涅槃
分。焉可思議。」
「清淨功德成就とは、願生偈に、『浄土のあり方を観ずると、
迷いの世界を超えている』といっていることである」と『浄土論』
に述べられている。これがどうして不可思議なのであろうか。あら
P. - 421
ゆる煩惱をそなえた凡夫が、阿弥陀仏の浄土に生れると、迷いの世
界につなぎとめるこれまでの行いも、もはやその力を失う。これは、
自ら煩惱を断ち切らずに、そのまま浄土で涅槃のさとりを得るとい
うことである。どうして思いはかることができようか」

『三経往生文類』（『聖典全書』二卷583頁）（『註釈版』18頁）（『註釈版』629頁）にも引文。

四、広門示現相

①難思議往生

法事讃では

弥陀釈迦十方諸仏諸菩薩の来臨を請う

厭離穢土欣求浄土、自利利他のために法輪を転じようと

難思議・双樹林下、難思と「往生楽」を讃嘆して願生心を表白する

宗祖が言葉を転用

難思議往生 他力念仏往生

双樹林下往生 自力諸行往生

難思往生 自力念仏往生

難思議往生とは

「利他圓滿之妙位、无上涅槃之極果」

煩惱具足の凡夫が真実報土の往生し、即座に無上涅槃の仏果を極めること。

人間はもちろん弥勒菩薩といえども思議することのできない本願力廻向の妙果であることを「難思議往生」という。

往生ということすらも難思議なのか

「実相、法性、真如、一如」と転釈。

「皆受自然虚无之身、无極之體」

往來を越えた往 無往の往

生死を超えた生 無生の生

真如は相を超えた絶対の一、すなわち一如である。

いつ難思議往生するのか

「信文類」便同弥勒（『聖典全書』一巻103頁）（『註釈版』264頁）

眞知、彌勒大士窮等覺金剛心故、龍華三會之曉、當極无上覺位。念佛衆生窮横超金剛心故、臨終一念之夕、超證大般涅槃。故曰便同也。

証文類（『聖典全書』二巻133頁）

（現代語版「教行信証」本願寺出版329頁）

謹顯眞實證者、則是利他
圓滿之妙位、无上涅槃之
極果也。即是出於必至滅
度之願。亦名證大涅槃之
願也。然煩惱成就凡夫、
生死罪濁群萌、獲往相回
向心行、即時入大乘正定
聚之數。住正定聚故必至
滅度。必至滅度即是常樂。
常樂即是畢竟寂滅。寂滅

【一】 つつしんで、真実の証を顕せば、それは他力によって与えられる功德の満ちた仏の位であり、この上ないさとおりという果である。この証は必至滅度の願〔第十一願〕より出てきたものである。この願をまた証大涅槃の願とも名づけることができる。

さて、煩惱にまみれ、迷いの罪に汚れた衆生が、仏より回向された信と行とを得ると、たちどころに大乘の正定聚の位に入るのである。正定聚の位にあるから、浄土に生れて必ずさとりに至る。必ずさとりに至るといふことは、常樂我浄という徳をそなえることである。この常樂我浄の徳をそなえるといふことは煩惱を滅し尽した境地、すなわち畢竟寂滅に住することである。この寂滅はこの上ない

即是无上涅槃。无上涅槃即是无爲法身。无爲法身即是實相。實相即是法性。法性即是眞如。眞如即是一如。然者、彌陀如來從如來生、示現報・應・化種種身也。

(中略)

願成就文、『經』(大經*卷下)言、「其有衆生、生彼國者、皆悉住於正定之聚。所以者何。彼佛國中无諸邪聚及不定聚。」

又(大經*卷上)言、「彼佛國土、清淨安穩微妙快樂。次於无爲泥洹之道。其諸聲聞・菩薩・天・人、智慧高明神通洞達。咸同一類、形无異。但因願餘方故、有人天之名。顏貌端政超世希有。容色微妙、非天非人。皆受自然虚无之身、无極之體。」

さとり、すなわち無上涅槃である。この無上涅槃は生滅変化を超えた真実そのもの、すなわち無爲法身である。この無爲法身はすべてのものの真実のすがた、すなわち実相である。この実相はすべてのものの変ることのない本性、すなわち法性である。この法性はすべてのものの絶対究極のあり方、すなわち眞如である。この眞如は相を超えた絶対の一、すなわち一如である。そして阿弥陀仏は、この一如よりかたちを現して、報身・応身・化身などのさまざまなたを示してくださるのである。

【四】 願「(第十一願)」成就文は、『無量寿經』に次のように説かれていた。

「浄土に生れる人々は、すべて正定聚の位にある。なぜなら、阿弥陀仏の浄土には邪定聚や不定聚のものはいないからである」

【五】 また次のように説かれている「(無量寿經)」。

「阿弥陀仏の国は浄く安らかであり、すぐれて楽しく、涅槃のさとの世界である。その国の声聞・菩薩・神々・人間は、みなすぐれた智慧と自由自在な神通力をそなえ、姿かたちもみな同じで、何の違もない。ただ他の世界にならって人間とか神々とかいうだけで、その顔かたちの端正なことは世に超えすぐれており、その姿は美しく、いわゆる神々や人間のたぐいではない。すべてのものが、きわまりなくすぐれたさとの身を得るのである」

②浄土の正定聚

從如來生、示現報・應・化種種身



（『聖典全書』一巻137頁）（『註釈版』313頁）
 二言還相回向者、則是利他教化地益也。則是出於必至補處之願。亦名一生補處之願。亦可名還相回向之願也。顯『註論』。故不出願文。可披『論註』。

第二十二願

（『聖典全書』一巻139頁）（『註釈版』316頁）

經当面

論註

本典

設我得佛、 他方佛土諸菩薩衆、 來生我國、 究竟必至一生補處。	往生 願事 一生補處	往生 願事 一生補處 本国位相 除外 他方撰化	往生成仏 願事 從果還因 本国位相も 他方撰化も 証果の展開相
除其本願自在所化、 爲衆生故、被弘誓鎧、 積累德本、度脫一切、 遊諸佛國、修菩薩行、 供養十方諸佛如來、 開化恆砂无量衆生使 立无上正眞之道。	除外 あえて一生補處 に至らず、衆生教 化したる者は除く	浄土には七地沈空の常 倫がない。速やかに一 生補處に至るのは本願 力を増上縁とするから	從因至果の常倫を 超えて、一生補處 にとどまらないよ うな諸地の行を現 前する
超出常倫、諸地之行 現前、修習普賢之德。	一生補處する常倫に 至らず他方撰化する		
若不爾者、不取正覺。			

以上。何かお気づきの点がありましたらお知らせください。

〒五九九一八一二五

大阪府堺市東区西野521 旭照寺

山上正尊

senjakuhongan@gmail.com